

「遺る人・継ぐ人」

岡山県 西福寺住職 山田 良天

ある時テレビを見ておられますと、ある島の醤油屋さんが特集されていました。先代は、こだわりの醤油を作っていました。大量生産された安価な醤油が主流となり、その波に逆らえず安い醤油も作っていました。

先代の息子であるヤスオさんは家業を継ぎ、その厳しさを知りました。

いい醤油を作れば値段が高くなり、高くなれば取引先がなくなります。先代の経営も、相当苦しかったことがわかりましたが、ヤスオさんは、それでもこだわりの醤油を作ろうと努力を重ねました。

やっと経営も安定してきた時、ある問題が起きました。こだわりの醤油を作るには、昔ながらの醤油樽が必需品です。今ある醤油樽が、いつまでもつのか？ もし駄目になったらどうしよう？と考え、ヤスオさんは島を出て樽作りの修行を積み、技術を身につけて帰ってきました。

すると、また問題が発生、樽に使う材木は手に入るのでありますが、杵を作る竹が無いのです。短い竹ならあるのですが、杵に使う竹は長いものがが必要です。困り果てたヤスオさんは、立派な竹藪を持つある長老を尋ねました。長老は「あなたのお爺さんに『裏山に竹の株を植えてほしい。そのうち必ず必要になるの』と頼まれた」と教えてもらいました。また家の倉庫には、古い樽に使っていた材木がありました。母親に聞くと「この材木には醤油を作るために必要な菌がいっぱいついとるから、これが必要になる時が来るかもしれない」と先代が残しておいたことを教えてもらったそうです。

「自分一人で生きている人など一人もいません。多くの人に、陰に日向に支えられて生きています。それらのご恩に報いるためにも、今を大切に生き次世代に何かを残していけたら・・・」と、ヤスオさんのお話を聞き私はそう強く感じました。